
霊力にお願い

凜人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊力にお願い

【Nコード】

N5721A

【作者名】

凜人

【あらすじ】

親友、新山葉月と一緒に電車事故に巻き込まれてしまった佐伯陽。何とか命は取り留めたものの途方にくれている中、一人の女性、マキと出会う。その女性は霊と人をつなぐ役割、スピリチュアルカウンセラーだった。

“それは一瞬の出来事だった”

オレは親友、葉月と出かけるため急行の電車に乗っていた。

「で今日は何よ？」

毎度のことながらも解りきったように葉月に尋ねた。

「そうだなあ。どうする？」

「おまえいつもそうじゃねえか」

「いいじゃん。どうせヒマだろ？」

「うるせーよっ」

オレ、佐伯陽と新山葉月は高校入ってから仲。高校もう卒業して半年近くたとうとしている。二人とも進学は考えていたが、とりあえず一年はフリーターというものをすることにした。

電車の中、何気ない会話を交わしながら葉月がこう切り出した。

「おまえ、来週誕生日だよな？」

いきなりで驚く陽。

「えっ。覚えてたんだ。お前毎年忘れてるから」

「さすがに今年はな。へへっ。でさ。ちよつと早いけど」

そう言って持っていたバッグに手をかける葉月。

「えっ。マジで？」

葉月から何かをもらうつという事が初めての陽は顔から笑みが止まらなかった。まして誕生日プレゼントだ。

しかし　その時

「何か変だよね？」

「揺れてる……」

「いつもよりスピード出てない？」

乗客がざわつき始めた。

確かにいつもと違う。極端にスピードがでてる。

“やばい”

そう思った瞬間だった。非常ブレーキが作動したのか分からないがガラスを引っ掻くようなすごい音がした。しかし、直前に控えていたカーブには間に合わなかった。

脱線した。

“オレは他の乗客が宙に浮くのを見た。いや、浮いてたんじゃない。飛んでいた。オレに向かって前に立っていた奴らが飛んで来たのだ。でも、どうして……”

その後すぐにオレは意識を失った。

C o u n t . 1 . 2 葉月

「ねえっ！ここにケガ人がいるの！早く助けて！」

「ここが現場です。とても見るに耐えられないという状況です。」

騒がしい声にオレは目を覚ました。

“生きてる…痛い…”

オレの上に何人も人間が乗っかっていた。しかしおかしい。窓の外には空しか見えない。その時オレは気付いた。

“電車は、オレらの乗ってた車両は横転したんだ。あの時オレに向かって飛んで来た奴もそういうことだ。”

何かを思い出したのか辺りを見回す陽。

“葉月…。葉月は？…”

確かにこの“事故”が起こる前までは隣にいた。しかし近くに見当たらない。

“動くに動けない…。足が痛む…”

上に乗っている奴らが動く気配がない。気絶しているのだろうか。それとも…。そもそもオレは一体どのぐらい気を失っていたのだろうか…。

その時、おもむろに晴れた空を映し出していた窓のドアが軋む音を出しながらゆっくりと開いて行くのをオレの目は確認した。

「おーい！生存者は返事をしてくれ！」

“ 助かった…”

救急隊の人だろうか。何人かの人が入って来てオレの上に乗っている人たちをどけていく。やはりもう意識はないのだろうか…。オレは下敷きになっていたオレ自身が生きているという事に驚いていた。オレは救急隊の人に担架で運ばれ外に出た。そのまま救急車に乗せられるかと思ったらそうではなかった。オレもそれを望んでいた。他に大勢いる重傷の患者が優先らしい。オレはかつて乗っていた、今は見るも無残な電車から数十メートル離れた草むらの上に担架ごと寝かされた。

人間とは醜いものだ…。オレは今になって本気で葉月のことが気になった。葉月はオレの親友だ。本当に大事な奴だ。それなのに…。それなのにオレは、自分が助かる事で精一杯だった。もしかしたら葉月はまだ車内にいるのかもしれない。許してくれ、葉月。

“ 今、行く…。”

C o u n t . 1 . 3 再会

「葉月ー！葉月ー！」

オレはオレと同様に担架で寝ている人間、軽傷で済んだのか座っている人間を見回しながら必死で葉月の名前を叫んだ。

“ こんなオレなんかのために誕生日プレゼント用意してくれたのか
…”

涙があふれてきた。

“ こんなことなら出掛けないで一緒に家でゲームでもしてりやよかった。無理してこの電車に乗らずに次の各停でもよかった。そもそも何なんだよ。この事故は…”

「聞いた？運転手寝てたらしいわよ。」

「運転手も即死だったらしいわね。」

救助の手伝いに来ていた近所の主婦だろうか。オレの心の声が聞こえていたかのようにオレの疑問に答えてくれた。でもオレは

「ありがとう」

と言える心境じゃなかった。

“ 運転手が…寝てたか…”

なぜだかオレはその時だけ、その時一瞬だけ“ 悲しみ” や“ 怒り” というものを忘れたく皮肉にもどこまでも広がる青い空をほんの数

秒眺めていた。

“ 葉月を探さなきゃ ”

左足はたぶんひびが入っているだろう。でもオレは待てなかった。
葉月の元気な顔を見ればこの痛みも吹っ飛ぶ気がした。

立ち上がるうとした陽だが、あまりの痛みによりけてしまった。

が、しかしよろける寸前に誰かがオレを支えてくれた。

「すいませ……」

支えてくれた“ 誰か ” がオレの目に映った瞬間、オレの中から安心感とうれしさと涙がこみあげてきた。

「 …… 葉月 …… 」

オレを支えてくれていたのは葉月だった。

オレは涙が止まらなかった。声をあげて泣いた。人目なんて気にしなかった。不安や寂しさ、大事な奴を失った時の怖さからやっと解放された。

泣いてる陽を葉月はただ強く抱きしめていた。

オレもようやく平静を取り戻し葉月に支えられながら近くのベンチに座る。

が、しかしオレは葉月が不思議でたまらなかった。

Count・1・4 地獄

「なあ…葉月…。」

「ん、何？」

「おまえ…。」

葉月の体に目を向けた後、言葉を続ける。

「おまえ、どこも怪我してないよな？」

オレは足も痛むし、服には自分のものではないが血液がついている。あとは打撲だろうか、腰等が痛い。葉月は怪我どころか服にも事故以前と変化が見られない。乗客も何人乗っていたのかは知らないが死者も多数いるようだ。言葉は悪いがそれに比べればオレのこの怪我也幸運と呼ぶ他に何も無い。それ以上に葉月はツいていたのだろうか。

「うん。何かわかんないけどオレはこの通り。目が覚めた時も痛みはなかった。それよりも陽の事が気になって気になってしょうがなかったからな。」

「葉月…。」

「それに…。」

「……。」

「オレが怪我してたとしてもおまえのこと見つけるまでは必死になつて探してたよ…。おまえみたいにな…。」

陽は涙目を葉月に気付かれぬよう遠くを眺めるふりをした。

数分だろうか、二人の間に沈黙が続いたが陽が口を切った。

「何かオレら怖いぐらいにこの状況を冷静に受け止めてるよな。」
「実際はこんなもんなんじゃないか？」

少し間を空けて陽が言葉を続ける。

「葉月が…。」

陽に目を向ける葉月。

「葉月がオレを助けてくれたんだよな…？」

葉月は目線をゆっくりと下に落とす。

「声が聞こえたんだ。」

「声？」

「ああ。おまえの声が。」

「ん……んっ……。」

目を覚ます葉月。しかしそこはさっきまで何気ない会話を交わしていた電車の中とは思えなかった。窓ガラスは割れ、ぐったりとして
いる人間、血の匂い。まさに地獄だった。

C o u n t ・ 1 ・ 5 名 前

「陽…」

辺りを見回す葉月。

近くに何人も人間の下敷きになっている陽を見つけた。咄嗟に駆け寄り陽の呼吸を確かめる。

「よかった…。生きてる…。待ってる。今助けてやる」

しかし力が出ない。ショックのあまり気が動転しているのだろうか。人一人動かす事もできなかった。

「くそ。誰か呼んでくるから、もう少し待っててくれ。」

「ちょっと待てよ。おまえどうやって出たんだよ？救急隊が来た時はちゃんと扉閉まってたんだぞ。」

「それが…覚えてないんだ…。きつと無我夢中だったんだと思う…」

思いつめた表情で葉月を見つめる陽。

そして電車から出たオレは色んな人に助けを求めた。

「すみません！中に友達がいるんです！助けてください！」

「下敷きになつて動けないんです！お願いします！」

でも 誰も 相手に してくれなかった…。

『…………。仕方ないじゃんか。みんなパニックってるのは解るだろ。それにそういう風に助けを求めてたのはきつとおまえだけじゃない。気にすることない。現にオレはこうして生きてる。おまえのおかげだ。ありがとう…。』

どうしようか考えてた時おまえがオレの名前を呼ぶのが聞こえたんだ。

「葉月ー！葉月ー！」

オレは必死になって声がする方に走った。

ちゃんと伝わった。誰かが助けてくれた。うれしかった。

葉月が照れたように笑いながら言う。

「おまえもオレの事探してくれてたの、うれしかったよ。」
「だってオレら親友じゃんか。」

そこに一人の警察官が近づいて来た。

「生存者かい？悪いが名前を覚えてくれないか？」

「オレは佐伯陽です。」

「サエキ…ヨウくんだね。ありがとう。」

そう言つてメモを取り終わると警察官は行つてしまった。
「えっ？オレは？」

葉月の言葉を遮るように一人の女性が話し掛けてきた。

Count・1・6 謎の女

「君たち生存者？」

その女性は淡い水色のスーツがよく似合う人だった。女性にしては背も高い。165ぐらいありそうだ。顔立ちもすつきりしていて美人。髪も少し茶髪の長めだ。でもどう見ても20代前半だ。オレらとそんなに変わらないだろう。一体何の用だ？

「はい……。そうですけど……」

女が葉月と目を合わせる。しかし葉月はすぐに目をそらした。

「私はマキと言います。よろしく。」

「え、名字？名前？」

「……。名前です。」

「はあ……」

オレと葉月は顔を見合わせ怪訝そうな表情を浮かべた。そして陽は“マキさん”とやらの人の後ろにいる犬に気がついた。

「その犬、あなたの犬ですか？」

マキは少し驚いた表情を見せた。

「そうよ。とりあえず私と一緒に来てほしいの。」

「え？どこにですか？」

「それはまだ言えないの……」

陽はマキの目をじっと見つめる。

「……。葉月、肩貸してくれないか？」

「あ、ああ……」

「いいわ。」

手を貸そうとする葉月をマキが手で遮った。

「私にまかせて。あなたも精神的とか色々と疲れてるでしょ。」

微笑むマキ。

「……。あの……本当にどこに行くんですか？」

葉月が尋ねる。

「心配しないで。ちゃんと病院にも行くから。」

周りがオレらを見てひそひそ話を始めた。

「じゃあ葉月くんも行こう。」

それに感じたのか急ぎ始めた。

「は、はい…。」

そして、マキの肩につかまりながら陽が尋ねた。

「あなた、誰なんですか？」

「今は説明している暇がないの。でも大丈夫。」

私を信じて。」

「…。分かりました。」

陽は少し考えてそう答えた。

なぜマキが葉月の名前を知っていたのか、という疑問を持たなくてはいけない事を二人は気付かなかった。

Count・1・7 アシスタント

少し歩いた所に一台のワゴンが停まっていた。

「さあ、乗って」

「ちよっ！ほんとにどこに連れていく気ですか！？」

ちょうどその時ワゴンの扉が開く。中には二人の男女が乗っていた。

「オレはタカシ。」

運転席の男が言い、後部座席の女が続く。

「私はユリ。」

「二人は私のアシスタントよ。大丈夫。目的地に着いたら全て話すわ。」

「……………」

無言のまま陽は葉月と目を合わせた。

戸惑いながらも仕方なくオレと葉月は言われるがままワゴンの一番後ろの席に乗り込むと、そのワゴンはすぐにどこかへ向けて出発した。

オレは不安でしやうがなかった。この人たちは誰なのか。このマキという人は誰なのか。ただあの時マキさんが言った

「私を信じて。」

よく解らないけどあの言葉に力を感じた。悪い人じゃない…。そう感じたんだ。葉月は…何を感じてるんだろう…。

「とりあえず先にその足をどうにかしましょう。」

数分間の沈黙を破りマキが口を切った。

「大丈夫。ただのねんざですよ。きっと」

さつきユリと名乗った女が振り返りオレを見てにこりと笑う。

「ああ、そうですか…。」

“きつと”が少し気になるが正直オレはほっとした。

「君。君。」

タカシがバックミラー越しに陽に話しかけてきた。どうやら話し掛けるタイミングを探っていたらしい。バックミラー越しに目を合わせる陽。

「その席に何枚かＴシャツが置いてあるだろう。」

確かに几帳面にたたまれたＴシャツが何枚か置いてあった。それを手に取って見せる。

「オレのだけと良かったら着替えたほうがいい。」

少し照れているらしい。以外と口下手なようだ。

今着ている他人の血液のついたＴシャツを自分で改めて確認してみる。

「ありがとうございます。」 陽はその場で着替える。

「あなたたち、本当に運がよかったわね…」

「いったい…あの電車には何人ぐらいの人が乗っていたんでしょうか…」

葉月がか細い声で問い掛ける。

「そうね…。ラッシュの時間帯じゃなかった事だけが救いね…。何人乗ってたかまでは解らないけど、死者は確認されているだけで１００人近くはいるそうよ…。」

「……………」。

陽と葉月はとても何かを言える心境ではなかった。

タカシとユリは複雑な表情をしている。

そして、どこか遠い所を見続けるマキの目はどこか哀しみを帯びていた…。

Count・1・8 1番きれいな涙

―病院―

「痛たたたたっ…」

生まれて早や19年たつが足に包帯を巻かれるのなんて初めてだ。
「もう大丈夫だよ。全治2週間で所かな。そんなにひどくない。」

“感じのいい人だ。30になるかならないかぐらいの人かな”

そこにちょうど席をはずしていたマキが入って来た。

「いきなりで本当にすいませんでした…。他にも患者さんがいらっ
しやっただのに…」

「いえ。あなたには恩がありますからね。私には断る理由はありません。」

“恩……?”

「それに幸い、私の所に来た他の患者さんもこの子と同じぐらいで
命に別状がある危険はありません。」

「そうですか……。でも…命は命…。命の価値なんて誰も変わらな
いのになんて違うんでしょうね…。残された命と、奪われた命は…。」

「…違いなんてありません…。」

二人は陽に目を向ける。

「……。陽くん?」

「違いなんてありませんよ！命の価値はみんな平等だ！ただ神が、いや死神が“寿命”という形でランダムに奪っていく…。ただそれだけのことだ……。」

そう言い放ち、陽は左足を軽く引きずりながら診察室を出ようとした。

「もし……。」

マキの声に陽は足を止める。

「もし…その“死神の気まぐれ”で、あなたの大事な人の命が奪われたとしたら……どうする……？」

陽はマキに背を向けたまますぐには反応しようとしなかった。

「オレは…泣くことしかできません…。その人を想って…泣くことしかできません…。オレは…弱い人間ですから…。」

そう告げると陽は診察室から出て行った。

「……。マキさん…。もしかして今回は彼を…？」

「……。はい……。」

「そんな…！？一体彼は…！？一体彼は誰と電車に乗っていたんですか…！？」

「瀬名さん、声を押さえてください。聞こえます。」

医者、瀬名は困惑する表情を見せマキとの会話が漏れぬようカーテンとドアを閉めた。

「すみません…。そして誰と…？」

瀬名は椅子に座るなり話を続けた。

「友達です…。」

「……。友達……？」

瀬名は明らかに動揺している。

「はい。しかし、彼は、彼の友達は…」
マキの目をじっと見つめる瀬名。

「自分が死んでいる事に気付いていません…。」

マキの言葉を聞き瀬名はうつむき黙ってしまった。

ふとマキが瀬名の着ている白衣に目をやる。彼の白衣は彼の涙で小さな染みを作っていた。

「助けてください…。」

マキが瀬名に目を移す。

「助けてあげて下さい…。彼を…。彼らを…。お願いします…。」

マキは少し考えて口を開いた。

「その涙は…誰のために流してるんですか…？彼らのため…？それとも…昔、亡くした親友のためですか…？」

「…。両方かもしれませんが…。」

涙をこすり笑顔で答える。

「泣って…悲しい時、嬉しい時、怒った時や痛い時、色んな時に流れるものだけど…私は、誰かを想って流す涙が…1番きれいだと思います…。」

診察室を出ようとドアノブに手をかけるマキ。

しかし一度ノブから手を離し、瀬名のほうを向いた。

「助けますよ。彼は

「その人を想って泣くことしかできない。」と言いました。ただ悲しいから泣くんじゃない。その人を想って、想って想って泣くことしかできない。私は、それは強い人間だと思います…。彼なら乗り越えられる。あなたと同じように。」

「僕は…強い人間ですか…？」

「それは…あなた自身がよく解っているはずです。」

そう告げるとマキは瀬名に一礼をし、診察室を後にした。

瀬名は椅子に座ったまま動こうとはしない。そして、おもむろに天井を見上げた。

「なあ…祐介…。もうすぐおまえの命日だな…。」

外ではタカシとユリが車内で待機をしている。病院に着いた時、マキは葉月に二人と一緒に車内で待つようにと言った。しかし葉月は従おうとはしなかった。困っている時だからこそ陽の側にいてやろう。マキは容易に葉月の心中を察する事ができた。それに少なからずアシスタント二人のことも気になったのだろう。マキは

「では葉月くんも一緒に行きましょう。」
「一言だけ告げ、車から降り葉月よりも先に陽の腕の下にもぐりこみ肩を貸した。」

「今、陽くん診てもらってるから、葉月くんはここで座って待ってね。」

マキは葉月を一番後ろの診察室から遠い長イスに座らせた。やはり患者はたくさんいるが皆、診察室に近い前列に集中して座っているため後ろの方はそれほど人がいなかった。

「わかりました。」

マキは葉月の返答に軽い反応を示すと陽と医者、瀬名のもとへと向かった。

数分後、診察室から出てきたマキは気が気ではない様子で陽たちのいる待合室へと急ぐ。

“やはり外で二人きりはまずい。”

待合室の奥の長イスに座ってテレビを見ている二人を見つけた。もちろんテレビの内容はどのチャンネルに変えても電車事故のこと

しかやっていない。

「あなたたちは、強いわね……」

いつの間にか自分のすぐ側まで来ていたマキに驚く陽。

「マキさん……」

「こんな事故、誰も望んでいなかった……。誰も想像できなかった……。電車の運転士もそう……。」

「……………」

「聞いた？電車の運転士、勤務直前まで病気の母親の看病をしてたそうね……。夫は何年も前に他界して、母一人、子一人。まだ独身だったみたいね……。本当に皮肉よね……。」

その時黙ってテレビを見ていた葉月が急に立ち上がりマキに目を向けた。

「一体何なんですか……。？あなたは……。！あの運転士の味方なんですか……。！？」

“葉月の声が震えていた”

「違うの…。そういう意味じゃないの。」

「何なんだよ…！この事故は…！？こんな事故が起きて一体何の意味があるんだよ…！オレたちは実験台じゃねえんだよ…！それに…こんなの…試さなくなつて…解るじゃんか…。運転士も…運転士の母親も…被害者も…被害者の家族も…友達も…みんなみんな悲しむだけじゃんか…。悲しむ人間が増えるだけじゃんか…。それに…。運転士だつて…、被害者だ…。」

“葉月…”

「でも…オレは…陽を助けられたから良かったよ…」

オレはこんな葉月の姿を初めて見た。普段は無口で正直何考えてるか分からない所もあるけど、だから余計驚いたし、こいつと本当に友達で良かった。そう再認識させられた。オレは言いたかった。色々言いたかった。

「ありがとう」

とかそんな簡単な言葉じゃなくて今のこの気持ちを表現したく必死で言葉を探していた。しかし悩んでいる間にマキに先手を取られてしまった。

「葉月くんの言いたいことは分かったわ。急ぎましよう。時間がないの。」

彼女はそう言い終えると病院の出口へ向かい歩きだした。

陽も痛む足をかばいながら立ち上がると、マキが足を止めた。同時に陽たちの方に振り返った。

しかしマキは陽を見ているのではなく明らかに視線は葉月に向いていた。

マキは葉月の目をじつと見つめる。

葉月も今度は視線を反らさなかった。

「葉月くん。」

「はい。」

「あなたの気持ちは無駄にはしないわ。」

“なぜだろう…。少し声が震えていた…？”

そう一言だけ告げ、再び病院の出口に向かい歩きだした。

オレと葉月は少し茫然としてその場に立ち尽くしていた。

テレビもついていたし、他の人の話し声も聞こえていたのは確かだが、オレの耳には彼女の“コツコツ”という自分の気持ちを押しさえた、どこか寂しげな冷静さが伝わってくる靴音しか響かなかった。

「なあ…。」

「……。」

「なあ…。陽。」

「…。えっ。どうした？」

『あの人を信用しろ…』

あの人に着いていけ…』

葉月が急にそんな事を言い出したのには驚いたが、オレは二つ返

事で

「うん」

と答えていた。

Count・1・11 目的地

病院を出てワゴンで待機していたタカシとユリと共にまた別の場所へ移動することになった。

車内は沈黙が続いていた。誰もしゃべろうとはしないのに不思議とそこには“気まずさ”というものは漂ってはいなかった。

陽と葉月はワゴンの3列目、つまり1番後ろに並んで座っていた。その前にマキとユリ。タカシが運転をしている。

陽は前に座っているユリに目を向けた。

“この人が…たしかユリさんだよな…。1、2個上なのかな。マキさんのアシスタントって言ってたけど一体何のアシストしてるんだ…？ちゃんと顔見てなかったけど、どこことなく宮崎あおいに似てたような…”

ユリが視線を感じたのかちらつと後方を確認したため陽は自然に視線を前方へと反らした。

“この人がタカシさんか…。マキさんよりも年上なのかな…。それでも24、5ぐらいだよ…”

そんな事を考えているとバックミラー越しにタカシと目があつた。一秒ぐらいだろうか、二人は目を合わせていたが、どちらからともなく視線をそらした。

そしていつの間にか目的地に着いたようだ。

「……は…？」

陽たちの目に飛び込んできたのはビルだった。しかしそれは高級マンションのようなオシャレなビルでもエリート商社マンが集う高層ビルでもなく、ホラー映画に出てくるような、たぶん、いや間違いない、現在は使われていない廃ビルだった。いや少なくともマキたちは使っているのだろうか。

ア然としているオレらをよそにマキさんをはじめ3人は
「着いて来て。」

と一言だけ残し、ビルの中へと消えていった。

“自動ドア…。電気は通ってるんだ…”

三人の後を追いつ、マキの後ろにいたあの犬もビルの中へと入って行った。

「あれ？なあ葉月。さっきの犬、車にいたか？」

「えつ。さあ？乗ってたからここにいるんじゃない？」

「まあ…。そうだな。。」

そして陽たちもビルの中へと足を運んだ。

中へ入り、まず驚いた事は想像以上に暗いということだ。いや、というより真つ暗だ。もう日も沈みかけてはいるが、夕日の光りくらしい差し込んできてもいいはずだ。その上マキたちの気配も既になかった。

「マキさーん。タカシさーん。」

陽は隣にいる葉月にしか届かないような声のボリユームで呼び掛けた。

人間というものはやはりこつ暗い場所だと警戒心というものを持つてしまうのだ。そのため自然と声も小さくなつてしまう。

もちろん、そんな細かい声で気配さえも感じられない人間に届くはずもなく二人は自力で三人を探すことにした。

とりあえず、一階にある数部屋のドアの一つを開けてみた。

案の定、部屋の中も真つ暗だった。窓ぐらいついてはいるはずだ。

まだ夜でもないのになぜ光が差し込まない。

陽は電気を付けようとスイッチを探す。電気が通っていることはさっきの自動ドアで確認済みだ。

壁を手探りしているとスイッチを見つけた。カチ。スイッチを入れてみる。しかし、付かない。何度も入れ直してみるが、やはり付く気配すらない。蛍光灯でも切れているのか。暗闇の中にカチカチという音だけが響く。

次第に陽の中には恐怖心が生まれてきた。

「葉月。電気つかないし。何でこんな真っ暗なんだ！？ってかあいっつらどこだよ！」

「陽、落ち着けよ。たぶん遮光カーテンが何かじゃないのか。」

“カーテン？でも外から見た時カーテンなんか付いてたか？いや、外見のインパクトに圧倒されていちいち窓まで見てなかった。”

「何でカーテンなんか閉まってんだよ。」

仕方なくオレたちは上の階へ移動することにした。

暗闇の中、コツ、コツと靴音を鳴らし階段を踏み締める。

陽は暗闇の中の恐怖と三人に置いて行かれた怒りで少し興奮気味だ。

「なあ。つつかさ、ここ何なんだよ。何でこんな暗いの？まさかここ全体さっきの部屋と同じ状態なのかよ？ってかあいつらこの真っ暗な中普通に進めるわけ？ってか普通置いてく？」

葉月は陽とは真逆で冷静沈着だ。

「落ち着けて。オレが知るわけないだろう。暑いんだからべたべたくっつくなよ。」

もはや陽は葉月にくっついていてる状態だった。一瞬陽は葉月から手を放したが数秒とたたないうちにまたしがみついていた。

呆れたように葉月が鼻で笑っている。

一歩ずつ、一歩ずつ前へ進む。階段をのぼる。暗闇にも目が慣れてきた。

「なあ……」

葉月がぼそりと口を開く。それだけなのに陽はあせってしまつ。

「なっ、なんだよ。」

「学校の怪談みたいで楽しいな。」

陽は呆氣にとられ、少し間をおいてからぼそりと呟いた。

「……。学校じゃねーし。」

「でもさ、陽。学校って昼間は楽しいところなのに何で夜になると怖いところになるんだろうな？」

「えっ……。本気で学校の話かよ……。そうだな……。やっぱりさっき言

つてた映画とかの影響があるんじゃないか？」

「まあ確かに。つまり夜の学校」怖い場所にしたのは映画ってことか？ だったらあんな映画がなかったら夜の学校」怖い場所の定義が成り立たないって事だよな？」

「うるせーなあ。おまえはいちいち理屈っぽいんだよ？ いいか学校とか場所なんて関係ないんだよ。重要なのは“夜”だろう。学校が怖いんじゃないかって夜だから怖いんだよ。それにそもそも夜間学校だってあるんだから要は明るさだろ。明るいお化け屋敷なんてないじゃないか。」

「ははは。納得。」

「要するに明るさがあれば切り抜けられるんだよ。どんなことも。苦しい時も悲しい時も前向きに考えれば明日は晴れる。笑える。今日の事故だってそうだ。ただ1番大事なのは生きてること。今オレもおまえもちゃんとここにいることだ。これからもな。」

葉月は何も言わずに一度だけ頷いた。どこか遠い目をして。

二人はいつの間にか立ち止まり話し込んでいた。

その時、蚊だろうが一匹の虫が現れ二人の周りを飛び始めた。二人は手で虫を払うしぐさを見せる。葉月は虫がどこにいるのか探し上下左右、目でたどる。しかし暗いので見つかるはずがない。そんな時ふと、陽の足元に目が止まった。

“あれ……？”

その時葉月は陽のある異変に気がついてしまった。

「なあ……陽……。」

「えっ。何？」

葉月に背を向けていた陽が振り返った。しかし葉月は陽と目を合わせようとはしない。ただ一点を見つめている。ただ一点、陽の足元だけを。陽もそれに気付き葉月の視線をたどる。その時、ようやく陽も気付いてしまった。

“……………！？”

「なあ……、足……平気なのか……？」

「……………」

陽はここまで痛がるそぶりも見せずに歩いて来たのだった。

「……………。どうしたことだよ……………？」

陽はもう何が何だか解らなくなっていた。さっきまで、ズキズキと痛んでいたのは覚えている。もちろん足には包帯も巻かれているのだから。

「ま……………」

言葉を発しようとしている葉月に反射的に目を向ける陽。

「ま…、まあ…初めからたいした事なかったんじゃないのか…？包帯を巻くぐらいで済むような怪我だったんだし……」

その時、陽の頭には医者、瀬名の言葉が浮かんた。

“
「大丈夫。全治二週間て所かな。そんなにひどくない。」
”

“いくら全治二週間っていったってこんなにも早く良くなるものなのか……？いや…、これはそういうレベルの問題じゃない…。
何かがおかしい…。”

「陽……？」

「あ…、いや…。確かに…お前の言う通りかもな…。」

オレは医者、瀬名に言われた事をあえて葉月には伝えなかった。

「ああ、そつだよ。奇跡だよ、奇跡。オレ達、運いいんだよ。」

「……。奇跡……。」

オレはこの“奇跡”が素直に喜べるものではないという事をまだ知らなかった。

Count・1・15 不信任

「いたいた！大丈夫？」

突然の声に驚き、陽達は声が聞こえてきた方に振り向く。

陽はその‘相手’に驚いてというよりは少し不信任を漂わせながら、ぼそり。と呟いた。

「タ、タカシさん……。」

「なかなか来ないから心配したよ。なにしろ真っ暗だしさ。」

ひょうひょうとした態度と‘真っ暗’なのが、さも当たり前かのようなタカシの発言に陽は少しムツとした口調で話す。

「何でここ、こんなに暗いんですか？」

「えっ……？えっと……それは……。」

「葉月も何か言ってやれよ。」

その瞬間タカシの表情が強張る。

葉月が何か言葉を発しようとした時、先にタカシが口を開いた。

「分かった！とにかくマキさんの所へ行こう。話はそれからだ。」

陽は納得のいかない様子でタカシを睨みつけた。しかしタカシはわざと気付かない振りをして歩き出す。真っ暗な階段をタカシに続いて上っていく二人。

タカシは平然とすたすたと歩いて行く。

「ちょっと！歩くの速いんですけど。」

「あ…ごめん。君…、陽くん、怪我してるもんね。」

さつき、その事を葉月と話したばかりなので、もうその事には触れたくないのか陽は答えようとしなかった。

「あのう、マキさんて…一体何なんですか…？」

葉月が尋ねたが、タカシは反応しようとはしない。

「シカトですか。」

陽が口をはさむと今度はちゃんと慌てて反応をするタカシ。

「えっ。何？」

「葉月が聞いてるじゃないですか。」

ほんの一瞬、タカシの表情に焦りが見えた。

「ごめん。ちょっと考え事をしていて聞いていなかったよ。もう部屋に着くから。」

タカシは笑ってごまかす。

陽は、足を止めた。

「タカシさん。」

さつきまでの声と明らかにトーンが違ったので陽が真剣な話をしようとしていると気付いたのだらう。タカシも足を止め、陽の方へ振り返った。

「……。何だい……？」

お互い、一歩も譲らず眼を離そうとはしない。

Count・1・16 タカシの涙

「マキさんて一体何なんですか？」

タカシはすぐには答えようとせず、ただ陽の眼をじっと見続ける。
「君は、そんなにあの人が信用できないのかい？」

「そんな事を言ってるんじゃないや。質問に答えて下さい。」

「おい、陽。」

空気が悪くなるのを止めようと葉月が割って入ってきたが、陽は聞く耳を持たなかった。

「答えてください……。」

陽はあくまでも冷静さを保とうとしていた。

タカシは何も喋らずに1、2歩、歩き陽たちに背中を向ける形をとる。

「マキさんは……大事な恩人だ……。」

「……………！！」

陽の脳裏に医者、瀬名の言葉が蘇る。

『いえ、あなたには恩がありますからね。私には断る理由はありません……。』

「彼女がいなければ……僕は……立ち直ることもできなかった……。」

「恩ってどういうことですか？」

「それは……。」

「どういうことですか？ねえ、タカシさん答えてください。ねえ…」
「陽、落ち着け。」

取り乱す陽を葉月が腕を掴み押さえ込む。陽の頭の中は混乱しきっていた。陽の目に映る葉月。
力強い、眼をしていた。

「マキさんは…」

タカシが顔をあげようとせず下を向いたまま口を開いた。

「マキさんは…君にとっても…人生を変える存在になると思う…。
陽くん、僕は…君の気持ちが高いほど…よく分かる…。でも…必ず…
必ずだ…彼女が…マキさんが助けてくれる…。あとは…君の気持ち次第だ…。でも…君は大丈夫…。わかるかい…？だって…信じてるだろ…？自分の事…、そして…葉月くんの事…。」

「……。信じてますよ。自分の事も、葉月の事も……。あなたたちの事も…。」

タカシは涙ながらに陽たちに微笑んで見せた。

陽にとっても葉月にとっても言葉にできない想いが募っていく。

その一部始終を陰に隠れて聞いていたユリ。彼女の瞳からもまた一雫の涙がそっと零れ落ちた。

そして落ち着きを取り戻したタカシとオレ達は、ようやくマキの待つ一室へと向かう。暗闇の中に靴音だけが響き渡る。誰も口を開こうとはしなかった。この沈黙も心地よかったのかもしれない。タカシが一度振り返り、ふいに陽と目があった。

そして、タカシが一つのドアの前で立ち止まると、2、3度ノックをする。コンコン。タカシは返事も待たずにドアを開いた。

「失礼します。」

あまりにも唐突だったのでオレは心の準備をする暇もなかった。ゆっくりと室内に目を向ける。その部屋もありえない光景だったが、陽の心はそんな事ぐらいではもうびくともしなかった。

全面コンクリートが打ちっぱなしのその部屋は、かるうじて明かりはついていたが、間接照明のみで薄暗く、やはり窓には遮光カーテンがかかっていた。

色も無機質なブラックでここはお化け屋敷か何かかとうたぐってしまふ。

そして何より気味が悪いのは、20畳ぐらいの広い室内には家具という家具がほとんど何もなかった。いや、正確にはあることはあるのだが、だだっ広い部屋の中央に四角いダイニングテーブルとイスが4脚のみ。ダイニングテーブルというのも不思議だが、それもちかも素材はステンレスなのだろう。間接照明に照らされ、怪しげな銀色の光を放っていた。

マキが何か声をかけてきた。その少し離れた場所にユリの姿もあった。

「そんな所に立ったままでもあれでしょう。中に入ってきて。陽

くん。葉月くん。」

オレはマキさんの目を見ないように、じっと佇み動こうとはしなかった。

「……。陽くん……。」

陽は

「はい」

という返事の代わりにマキの目を見る。

「……。警戒しないで……。」

“この人は毎回毎回、力を秘めた眼をオレに見せる。どんな言葉よりも1番信用できる。ここまで来てしまったんだ。この人を、この人たちを、とことん信用してみるのも悪くない。もし仮にこの選択が失敗だったとしても、また一つオレは成長できる気がするからでもそれは冗談だ。眼は嘘をつけないということをオレは知っているから。”

オレの肩に誰かの手が乗せられた。葉月かと思い、振り返ると心配そうな表情をしたタカシがこっちを見ていた。オレは肩にかかる手をそつとはずして、こう告げる。

「ありがとうございます。」

葉月といつも通りのアイコンタクトを取り、オレ達は部屋の中へと進んで行く。

マキは何一つ顔色を変えないまま、あくまで事務的に話を進めようとする。

「とりあえず座りましょう。」

あまりにも淡泊なその言葉の響きに陽たちは少し戸惑っていた。たった今、全身全霊でこの人たちを信じていこうと心に決めたばかりなのに、このマキという人はオレ達の心の中を見透かしているように態度をよく変える。

オレは冷静を装いつつ、ドアから少し離れたテーブルとイスの元へと歩き出す。

中央に四角いダイニングテーブルにイスが4脚。陽とマキが向かいあう形で席に着く。ユリとタカシもイスに近づく。葉月が陽の隣に座った。ハツとするユリとタカシ。二人に目配せするマキ。

「オ…オレはいいからユリちゃん座りなよ。」

「えっ…で、でも…。」

「いいから。」

「ご、ごめんなさい。」

残り一つの席にユリが座った。

葉月が気まずそうな顔をして口を開く。

「あっ…。すいません。タカシさん。よかつたら、オレの席に」

全てを言い終える前にマキが口を挟んできた。

「大丈夫よ。葉月くん。葉月くんが気をつかうことないわ。こう見えて彼、体力あるから。ね？タカシさん。」

「えっ？あ、ああ。大丈夫、大丈夫。何か立ってたい気分なんだよ

ねー。ありがとう。葉月くん。ハハハ。」

葉月はタカシの目をじっと見続ける。

“この人もユリさんも、オレと目を合わせようともしない……”

重たい空気が流れる中、マキが口を切った。

「陽くん。葉月くん。今から全てを話すわ。どうして私があなたたちに近づいてきたのか。そして今、葉月くん自身が疑問に思っていること、」

葉月が目を見張る。

「二人が感じている違和感。……。でも、話をする前に、最初につただけ約束してほしいことがあるの。」

「……。はい……。」

二人の声が重なり、お互いに目を合わせる。

「これから話す二人の“真実”を目を背けずにきちんと受け止めてほしいの。」

マキは二人の眼を見て一言、一言、ゆっくりとそしてはつきりと告げた。

陽と葉月は心を落ち着かせるために一度、深く目を閉じる。再び開いた時には、二人は今まで見せたこともない力強い眼をしていた。そしてお互いを一瞥するとマキに視線をもどし、落ち着いた声で

「はい」

と告げた。

その時だった。

「クーン。」

何やら犬の鳴き声が聞こえる。陽はまさかの思いで声が聞こえてきた方向に咄嗟に顔を向けた。その瞬間、陽は自分の目を疑い、言葉と息を飲み込んだ。陽の目線の先には、先程から気がつけば幾度と姿を見せていたマキが飼っているという例の犬が座っていた。

「……………！？……………おまえ……………何で……………どうして……………ここに……………！？……………」

さつきからこの違和感には気がついていたが、気のせいだろうと流して来た。しかし“気のせい”は二度続いた時点で“気のせい”ではなくなるのだ。今、陽の中でその“違和感”は“確信”へと変わっていた。

「……………。こつ、この犬、オレらが入ってくる時、部屋にはいませんでしたよね！？なあ、葉月！？」

「あ、ああ……………。たぶん……………」

“いや……………、たぶんじゃない。間違いない。小型犬じゃないんだ。こんな犬、部屋にいたらどうしたって目が行くはず。それに……………あの車の中だって今思えば犬がいた気配なんて感じなかった。ましてやオレらは1番後ろに座ってたんだぞ。気付かない訳がないだろう……………！？気のせいなんかじゃない。明らかに、何かがおかしい……………”

葉月が眉間にしわを寄せたまま口を開く。

「一体……………どうしたことだよ……………。万が一、万が一、仮に……………あの車には

乗っていたとして……」

「乗ってなかった……！！」

「仮にだ……！そんなこと解ってる、陽。仮にあの車には乗っていったとして、このビルにはちゃんと来ていたとする。でも……オレらがこの部屋に入った時にはやっぱりいなかった……！大きい犬だし、隠れられるような家具もない。誰も見ていないはずがない……！！ドアだってちゃんと閉めた。それにドアが開く音だってしなかった。第一、普通の犬はドアなんて開けられるはずがない。ねえ……、そうですよね！？ユリさん……！！」

すぎるような瞳で葉月はユリに問い掛ける。これは無意識にも葉月にとって人生をかけた最後の、最大の賭けだったのかもしれない。しかし現実はとても残酷で、ユリは状況が飲み込めず、ただ目を泳がせながら混乱しきっている様子で葉月の質問に答える気配すら感じさせなかった。

“頼む……。返事をしてくれよ……。”

Count・1・20 見えない犬

数秒の沈黙を破り、マキが毅然とした態度で口を開く。

「……。無理なのよ。葉月くん。」

葉月をはじめ、4人が一斉にマキに目を向ける。

「……。この二人には、あの犬が見えていないわ……。」

葉月は何も言葉が出ず、ただ力無く視線を落とす事しかできなかった。

陽は耳を疑った。いや、もしかしたら聞き間違いかもしれない。しかし、自分の耳だ。ごまかせない。『2人にはあの犬が見えない。』マキははっきりとそう告げた。信じられない。信じたくない。

「……。ちよっ……。何言ってるんですか？オレらをだまそうとしているんですか？からかっているんですか！？」

マキは何も言わずに陽の眼をじっと見続ける。

「だっ……。だつて……。そんなのっ……。ねえタカシさん！？」
タカシは陽に背を向けて目を合わせようとはしなかった。かすかに肩が震えていた。

「なあ…ユリさん…！？」

「……………」

「ユリさん…！！」

「…す…せん……………」

「えっ…………？」

「すみま…せん……。私たちには…見え…ません……………」

「…そ…そん…な…。一体……………」

「陽くん、落ち着いて。」

陽は勢いよくイスから立ち上がった。

「落ち着いてなんていられません。意味が分かりません。全然分かり」

「陽っ！！落ち着けっ！！」

陽とマキは少し驚いた表情を見せ、葉月に視線を移す。

葉月は真っ直ぐな瞳でオレを見ていた。手が少し震えていた。オレだって同じだ。でも葉月はきちんとマキと、現実と向き合おうとしている。大人だ。オレにはできないよ…。

「……病院でオレが言った事、忘れたのか？」

「…えっ……………」

『あの人を信用しろ。』

あの人に着いていけ……。」

「……葉月……。」

陽は目を閉じ再びイスに座る。

「マキさん。話を聞かせてください。」

“葉月くん……”

マキは一呼吸置いて話を切り出した。

「……あの犬は、もう亡くなっています。」

「えっ……!？」

陽と葉月が戸惑いの表情を見せる。

「近所の野良犬だったんだけど、私が餌をあげているうちになついてね……。だから今もこうして私の傍にいるのよ……。私の事を護ってくれているらしいわ……。」

不意に見せたマキの微笑にはどこか哀愁が漂っていた。

「必然的にマキさんにもこの犬が見えているんですね。」

マキは陽の言葉に何も答えず、一瞥すると話を続けた。

「ある日、私が偶然ハンカチを無くしてしまって……困っていた時、近くの草むらに落ちていたらしくて……その犬が見つ付けてくれたの……。すぐに届けてくれようとしたの……。車が来ているのに気付かずに、飛び出しちゃって……。きっと……私の喜ぶ顔が……早く見たかったのね……。」

犬は寂しそうな声で鳴きながらマキの足元にやって来て座り込んだ。

「そうだったんですか……。」

葉月が憂いを秘めた眼で犬を眺める。

「……?陽くん……?どうかした……?」

そして一人、複雑な表情で考え事をしていた陽がついに口を開いた。

「…………マキさんはその犬が見えていて、タカシさん、ユリさんは見えていないという事は分かりました…。では…………」
緊迫した空気が流れる。

「…………どうしてオレ達にも見えるんですか…………？」

今、運命の歯車が廻り出した。

覚悟はできている。もう後には引き返せない。マキさんの明かす全ての“真実”が、たとえ笑って済ますことのできない“現実”だとしても、オレはもう、逃げない。もう逃げないからな。葉月。

マキがユリに目配せをする。ユリが一度だけ頷くとタカシを連れてどこかへ行ってしまった。

再びマキは真剣な面持ちへと変わる。しかしすぐには答えようとせず、ただじつと陽の眼を見続けていた。陽の眼もまたマキの眼だけを捕らえている。一度マキが葉月に目を向けてから、陽に視線を戻すとゆっくりと話し始めた。

「一つ目は、陽くん。落ち着いて聞いてね。」

「……はい。」

「……あなたが、この犬が見えるのは“靈力”という力があるからなの……。」

「……靈力……！？」

「そう……。私があなたたちと接触できたのも、あなたの力に引き寄せられたと言っても過言ではないわ。でもまだとても微弱なものよ。あなたの力がどれだけのものなのか失礼ながら試させてもらうべく、この犬の靈も一緒に連れて行った。そしてあなたたちを探し出し、あなたはさも当たり前かのようにこの犬の靈を靈視していた。あなたはまだ気付いてないけどその力は、もっと……強くなる……！」

「……………」

陽の頭は混乱しきっていた。

“オレに霊力…？今までそんなの感じた事もないぞ。
なんで急に…”

一体どうなってるんだよ……。まさか…、この事件が引き金に……。？。いや、絶対にそう決まった訳じゃないし、第一これは夢だ。そうだ。そうに決まってる。こんなこと実際にある訳ないじゃないか。電車事故も、マキさんが話した事も、マキさんという人自身も、全部夢だ。目が覚めたらきつと今まで通”

「陽……！！！」

我に返ると、葉月がオレの肩を掴んでいるのが目に入った。

「…葉月…。」

“オレは毎回毎回こいつに助けられて来た。オレが頼りない分、こいつがしっかりしてくれてオレが道を踏み外しそうな時には正しい道に導いてくれた。オレはお前と出会ってから友達と違って照れ臭いし面倒だとか思ってたけど、こいつは、こいつだけは本当に『友達』だって胸張って言えるんだ。”

「なんかオレ…情けねーな…。」

“バーカ。オレはお前が情けねーなんて思った事、一度もねーよ。高校入ったばかりの時、内気だったオレの事すげー気にかけて喋りかけてくれたの、あん時はうまく言えなかったけど、本当はすごく嬉しかったんだぜ？そんな時初めて思ったんだ。『友達』っていいな

つて。なあ？陽、オレらの友情は一生モンだよな。”

マキが二人から目を離し沈痛な面持ちで俯く。

“……私がしっかりしないと……”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721a/>

霊力にお願い

2010年10月9日06時27分発行